

# 人づくり動き出す共創教育

## 次代につなぐ グリーンジョブ

三重県立宇治山田商業高校は、文部科学省の2019年度「地域との協働による高等学校教育改革推進事業(グローバル型)」の指定校に採択され、「観光都市 with SDGs」(伊勢志摩「未来創造プロジェクト」)を実施した。同事業では、国連の持続可能な開発目標(SDGs)の視点で自然・歴史・食文化などの魅力あふれる伊勢志摩地域を持続可能な社会として未来につなげるとともに、観光資源豊かな伊勢志摩の魅力を広く国内外に発信し、新しい観光ビジネスモデルなどを創造する力を身に付け、将来を担う「持続可能な未来を創造できるグローバルな視点を持った地域社会のリーダー」を育成することになった。

## 未利用資源を活用する 美食地政学

パート2 ▷2

この取り組みの次のステップには、おそらく地域社会の共通した価値観の醸成が必要である。かつては地域の人が他人の子どもをしつめた。地域で子どもを育てるという価値観が広く存在していた。場所には神社や寺が使われた。同級生同士も切磋琢磨して、一緒に経験して、学び、成長していった。この価値観は山学校と称された。学びに自然が生かされていた。自然と共生する暮らしがこれを可能としたのだ。地域社会から学び、地域の自然を利用することができれば、これらの価値観が戻ってくる。

21年7月、宇治山田商業高校の生徒5人はこの未来創造プロジェクトの一貫として青森県田子町を訪問し、自然資源を活用したフィールドワークなどを体験した。参加した生徒は「田子町では地域活性化やSDGsで頑張っている人が大勢いた。伊勢でも生かせるのではないか」と感想を述べている。

## 地域×高校生、自然を足場に

22年9月、三重県志摩市のスペイン村で、JSTの「美食地政学に基づくグリーンシヨブマーケットの醸成共創拠点」プロジェクトの「海賊サミット2022」が開催された。科学者、漁師、教師、高校生、大学生、政治家、市長、自治体職員、企業人が伊勢志摩地域の海の現状課題に目を向け、今後の展望を語った。高校生にとっては大人が真剣に議論する場に居合わせることが少なく、このこと自体が新しい体験となった。

海賊サミットでは高校生の意見が称賛され、高校生自身もキャリアを見直す機会になった。海賊サミットに登壇した高校生の1人が進学して都市部に出ていくことが決まっていたのだが、大人と一緒に楽しく地域活動する中でその地域に残りたいという気持ちが出てきたと話していた。地域の共創教育プラットフォームの効果も期待できる。

このような共創教育プラットフォームを支えるのは地域社会の力だ。地域社会が今後どのように変わっていくのか重要である。このプラットフォームの形成に必要なも



■就く仕事、自ら「つくる」  
三重県立宇治山田商業高校  
前田 裕美さん

共創教育プラットフォームの形成に取り組んだ三重県立宇治山田商業高校で未来創造プロジェクトを経験した前田裕美さんに、仕事に就くことや新しい仕事のつくり方について話を聞いた。

「当初は、とりあえず都会に行きたいという漠然とした目標を持っていました。やはり、高校に求人話が来て、それに対して行きたいところを選ぶという姿を見てきましたので、就きたい仕事がないから県外に行くという考えもありました。ところが、学校の課題研究などで地域課題について異なる捉え方や解決策などに触れることがあり、自分で課題解決策を提案することを仕事にしていけるのではと思うようになりました。自分と同じ考えの人たちと出会えることで新しいことにチャレンジする機会が生まれると思います。そのような経験を通して、本当に自分のやりたいことを仕事としてできるのではないかと考えるようになりました」

「志摩の横山展望台からの景色は、他地域の人が見るとすごくきれいだと言われますが、自分にとってはいつも見ている景色なので特別感はありません。ただ、そう言われると、ここはいいところなのかもしれないという気持ちになり、ここを誇らしく

## 地元で挑戦、人とのつながり大事

「『こういうことができたなら便利なのに』と気付いたとしても、そのままになってしまえば、新しい仕事をつくることにつながりません。高校で税理士などの社会人の方が仕事について説明してくれることがあります。仕事を詳しく知ることはできませんが、距離が遠いためか、それで終わってしまいます。それ以上に考えが及びません。ところが、高校生が自主的に課外活動をして活動範囲が広がっていくと、社会についての理解も深まり、自分の考えと同じ人に出会い、一緒に考えることができます。一緒にどのような仕事をつくるかを考えることも自分の将来について深く考えることもできると思います」(聞き手・古川教授)



東京都市大学環境学部  
環境経営システム学科教授  
古川 柳蔵  
ふるかわ・りゅうそう 72年(昭和47)東京都生まれ。博士(学術)。東京都市大学環境学部環境経営システム学科教授。専門は環境イノベーション。戦前の暮らし方、自然に学ぶものづくり、ライフスタイル変革の研究や地方・都市連携プロジェクトを行う。



のは、地域社会を見守ろうとする住民の価値観である。今も潜在的に存在する。都市部にも存在する。日常的には表には出てこないが、何かをきっかけに出るのだ。その一例を紹介したい。

東京都杉並区で地域活動をしている「未来の暮らし創造塾杉並」は、持続可能な地域コミュニティをつくり出すため社会福祉法人浴風会と協働で、農園プロジェクトを

浴風会の未利用地を利用した農園プロジェクト。通りすがりに声をかけてくる人も増えたという(未来の暮らし創造塾杉並提供)



この取り組みの次のステップには、おそらく地域社会の共通した価値観の醸成が必要である。かつては地域の人が他人の子どもをしつめた。地域で子どもを育てるという価値観が広く存在していた。場所には神社や寺が使われた。同級生同士も切磋琢磨して、一緒に経験して、学び、成長していった。この価値観は山学校と称された。学びに自然が生かされていた。自然と共生する暮らしがこれを可能としたのだ。地域社会から学び、地域の自然を利用することができれば、これらの価値観が戻ってくる。

## 交流通じ価値見直す目／見守る目

- 青森県田子町でのフィールドワークで地元伊勢の今後を考える
- 伊勢志摩地域の活性化を目指し自治体、企業人のほか漁師や科学者も集った「海賊サミット2022」では高校生の発言に参加者が感動(写真は2枚とも三橋正枝東北大学大学院特任助教提供)

未利用だった土地を耕し続けた結果、通行人が気にかけてくれるようになった。毎年、敷地内をよくふう保育園の子どもたちと手掘りイベントが行われるようになった。徐々に浴風会の中の老人ホーム施設利用者の園芸への関心が広がっているようだ。3年間で確実に地域の温かい目が表出し、地域を見守ろうとする住民の価値観が形成されてきている。未利用だった土地が生きて、花を咲かせ、農作物が成長する。この地域の変化は小さな変化かもしれないが、最初の一步は小さいものだ。この温かい目が将来のコミュニティづくりや共創教育プラットフォームを支えることになる。



三重県立宇治山田商業高等学校  
東京都市大学  
古川 柳蔵